

第3問

次の文章は『石上私淑言』の一節で、本居宣長が和歌についての自身の見解を問答体の形式で述べたものである。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

問ひて云はく、A 恋の歌の世に多きはいかに。

答へて云はく、まづ『古事記』(注1)『日本紀』に見えたるいと上つ代の歌どもをはじめて、代々の集どもにも、恋の歌のみことに多かる中にも、『万葉集』には相聞とあるが恋にて、すべての歌を雑歌、相聞、挽歌と三つに分かち、八の巻、十の巻などには四季の雑歌、四季の相聞と分かつてり。かやうに他をばすべて雑といへるにて、歌は恋をむねとすることを知るべし。そもいかなればかくあるぞといふに、恋はよろづのあはれにすぐれて深く人の心にしみて、いみじく堪へがたきわざなるゆゑなり。されば、すぐれてあはれなるすぢは常に恋の歌に多かることなり。

問ひて云はく、おほかた世の人ごとに常に深く願ひ忍ぶことは、色を思ふよりも、身の栄えを願ひ財宝を求むる心などこそは、(ア) あながちにわりなく見ゆるに、などでさるさまのことは歌に詠まぬぞ。

答へて云はく、B 情と欲とのわかまへあり。まづすべて人の心にさまさま思ふ思ひは、みな情なり。その思ひの中にも、とあらまほしかくあらまほしと求むる思ひは欲といふものなり。されば、この二つはあひ離れぬものにて、なべては欲も情の中の一種なれども、またとりわきては、人をあはれと思ひ、かなしと思ひ、あるはうしともつらしとも思ふやうの類をなむ情とはいひける。さるはその情より出でて欲にもわたり、また欲より出でて情にもわたりて、一様ならずとりどりなるが、(イ) いかにもあれ、歌は情の方より出で来るものなり。これ、情の方の思ひは物にも感じやすく、あはれなることこよなう深きゆゑなり。欲の方の思ひはひとすぢに願ひ求むる心のみにて、さのみ身にしむばかり細やかにはあらねばにや、はかなき花鳥の色音にも涙のこぼるるばかりは深からず。かの財宝をむさぼるやうの思ひは、この欲といふものにて、物のあはれなるすぢにはうときゆゑに歌は出で来ぬなるべし。色を思ふも本は欲より出づれども、ことに情の方に深くかかる思ひにて、生きとし生けるものまぬか

れぬところなり。まして人はすぐれて物のあはれを知るものにしあれば、ことに深く心に染みて、あはれに堪へぬはこの思ひなり。その他もとにかくにつけて物のあはれなることには、歌は出で来るものと知るべし。

さはあれども、情の方は前(注3)にいへるやうに、心弱きを恥づる後の世のならばしにつつみ忍ぶこと多きゆゑに、かへりて欲より浅くも見ゆるなめり。されど、この歌のみは上つ代の心ばへを失はず。人の心のまことのさまをありのままに詠みて、めめしう心弱き方をもさらに恥づることなければ、後の世に至りて優になまめかしく詠まむとするには、いよいよ物のあはれなる方をみむねとして、かの欲のすぢはひたすらにうとみはてて、詠まむものとも思ひたらず。

まれまれにもかの『万葉集』の三の巻に「酒を讃めたる歌」の類よ、詩には常(注5)のことにて、かかる類のみ多かれど、歌にはいと心づきなく憎くさへ思はれて、(ウ)さらになつかしからず。何の見所も無しかし。これ、欲はきたなき思ひにて、あはれならざるゆゑなり。しかるを人の国には、あはれなる情をば恥ぢ隠して、きたなき欲をしもいみじきものにいひ合へるはいかなることぞや。

(注) 1 『日本紀』——『日本書紀』のこと。

2 挽歌——死者を哀悼する歌のこと。

3 情の方は前にいへるやうに——この本文より前に「情」に関する言及がある。

4 酒を讃めたる歌——大伴旅人が酒を詠んだ一連の歌のこと。

5 詩——漢詩のこと。

問2 波線部「身にしむばかり細やかにはあらねばにや」についての文法的な説明として適当でないものを、次の①～⑤のうち

ちから一つ選べ。解答番号は 24。

- ① 打消の助動詞「ず」が一度用いられている。
- ② 断定の助動詞「なり」が一度用いられている。
- ③ 仮定条件を表す接続助詞「ば」が一度用いられている。
- ④ 疑問を表す係助詞「や」が一度用いられている。
- ⑤ 格助詞「に」が一度用いられている。

身にしまむばかり細やかにはあらねばや

身	17	体言	普通名詞(花)	身	体言(名詞)
に	50	格助詞	へ	に	格助詞
しみる	1	用言動詞	しむ	しむ	用言動詞
ホド	53	種々の語に接続	ばかり	ばかり	種々の語に接続
情が深く	12	活ナ	な	な	用言動詞
ハ	52	係助詞	は	は	係助詞
ナイ	9	ラ変	あら	あら	補助動詞
カラ	25	打活	ざ	ざ	用言動詞
テアル	51	形已然	なり	なり	用言動詞
カ	43	係助詞	な	な	係助詞

心が強く引かれる

「古典文法カード」で品詞分解

(あらむ)

1 打消の助動詞「ず」が一度用いられている。

黄色カード 一度

2 断定の助動詞「なり」が一度用いられている。

緑色カード 一度

3 仮定条件を表す接続助詞「ば」が一度用いられている。

仮定条件を示す、未然形に接続する助詞カード なし
已然形に接続する「ば」は、確定条件を示す。

4 疑問を表す係助詞「や」が一度用いられている。

文末にある種々の語に接続する助詞カード 一度

5 格助詞「に」が一度用いられている。

体言カード「身」につながる格助詞カード 一度

適当でないものは

3